

日を重ねるごとに冬の寒さも和らぎ、芳しい花々の香りに春の訪れを感じる季節となりました。本日は、新型コロナウイルス感染症の収束が待たれる中、様々なご高配を賜り、私たち 100 名の門出に対してこのような式典を挙げて頂き、誠にありがとうございます。また、ご来賓の皆様、平野学長、諸先生方にご臨席を賜り、卒業生一同、心より感謝申し上げます。

振り返れば、本日に至るまでの四年間の学生生活は、何事においても自分たちの持てる力を信じて全力を注ぎ続けた、とても有意義で充実した日々だったように思います。

一年次は、看護とは何か、人間が生きるとは、病むとはどういうことかという看護の根本をナイチンゲールの「看護覚え書」から学修し始めました。科学的な視点で看護を捉えることや、生命の歴史を宇宙や地球規模で考えることに驚き、内容の奥深さや難解さに不安を覚えつつも、卒業する頃にはこれらをしっかりと理解できるほどに成長したいと決意を新たにすることが思い返されます。

二年次は専門的な科目やその専門性、実践力を高めるための学修が始まりました。技術練習では放課後や隙間時間を使いながらグループの皆と練習し、お互いの技術を高めあって実技試験に臨んだことも良い思い出です。

そして三年次は、二年半で培った知識・技術を総動員して半年間の実習に臨みました。実習で出会った患者さんひとりひとりと真摯に向き合い、今この方には何が必要で自分たちは何ができるのか、「生命力の消耗を最小にする」看護につなげるために毎日考え、悩み、患者さんに良い変化が見られたときには自分のことのように嬉しくなりました。リモート実習に変更となった期間、一人の方の事例をグループで受け持つての実習は、様々な視点からの意見が飛び交い、活発なディスカッションを経て看護展開ができ、臨床実践能力を高め、看護観を確立していくうえでとても貴重な経験となりました。

そして最終学年、私が最後の実習で出会った患者さんは、がん終末期の方でした。この方は余生を自宅で過ごしたい気持ちと、同居する息子さんに迷惑をかけたくないという母としての思いの狭間で葛藤しておられ、退院前訪問や幾度ものカンファレンスを経て自宅に戻ることを決意されました。初めてお会いした時から「この歳まで十分すぎるくらい生きたからもういい。早く迎えに来てほしい。」と、生きることへの思いが小さくなってしまっており、関わりを続けていくうちに私の中で、小さな楽しみや喜びを見つけ、感じながら残りの時間を過ごしてほしいという思いが膨らんでいきました。そこで、お花が好きなこの方が毎月めくるのが楽しくなるよう、月ごとに季節のお花の写真と花言葉を添えた手作りのカレンダーをお渡しし、楽しみにしておられた一時帰宅の予定と一緒に書き込むと「宝物ができた。これを使い切るまでは生きないかね。」と優しい笑顔で仰ってくださいました。まだまだ未熟な私の関わりでもこの方の生きることへの思いを少しでも大きくすることに繋がったことに喜びを感じ、また同時に、私たちの言動が患者さんの認識に影響を及ぼすことを実感し、改めて責任を自覚した出来事でもありました。

実習、就職活動、卒業研究、国家試験と目の前の出来事に特に必死だったこの一年間、立

ち止まりそうになった時は先生方や家族から支えてもらい、友人たちと励まし合いながら乗り越え、私たちは今日卒業の日を迎えることができました。

そして私たちはこれからまた、それぞれの道へと歩み始めます。ひっ迫する医療現場で働く中で、たくさんの壁にぶつかることもあるでしょう。しかし、＜日々進歩する医療現場では、学びを続け進歩しない限りそれは退歩していることだ＞とナイチンゲールの言葉にもあるように、どんなときも私たちは歩みを止めず一步一步進んでいこうと思います。学び続ける必要性、患者さんへ三重の関心を注ぐことの大切さ、チームナーシングの在り方、この4年間で得た、たくさんのものが間違いなく、私たちの看護師人生において常に心のよりどころとなり、ぶれない自分の軸となると確信しています。

結びにあたり、今日まで熱心にご指導くださった諸先生方、より良い学びの環境を整えてくださいました職員の皆様、臨床実習を通して多くの学びをくださった患者様や指導者の皆様、そして、一番の応援者であり陰ながらあたたかく見守り、支えてくれた家族、ともに支え合った最高の友人たち、全ての方々に深く感謝申し上げますとともに、本学の今後の益々のご発展と在学生の皆様のご活躍を心よりお祈りいたしまして答辞とさせていただきます。

令和5年 3月16日

第23回 卒業生代表 那須愛加